
私の日記

うゆ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

私の日記

【Nコード】

N9716F

【作者名】

うゆ

【あらすじ】

母親の恵まれない育児、度重なる暴力から精神的に追い詰められ、ある日を境に一線を越えてしまった一人の少女の物語。

仲良し日記

...

8月14日 金曜日 晴れ

今日は、友達とお外であそんだ。楽しかったまたあそびたい。

8月15日 土曜日 くもり

今日は、本を読んだ。二人で読んでてすごく楽しかった。

8月17日 月曜日 晴れ

ママが、男の人を連れてきた。

8月18日 火曜日 晴れ

きのうおうちに来た男の人が、ジロジロ見てきた。

とってもこわい。早く出てってほしい。

8月20日 木曜日 雨

ママが私にいたいことをしてきた。

8月21日 金曜日 雨

またママがたたいたりしてきた。もうやだ。

けどがまんしなさいって言われた。

8月26日 水曜日 くもり

もうこんなのやだ。いたいのやだ、固いのでたたくのやだ、熱いの
でジュってするのやだ

ママがまんしろって言うけど、もうやだ。

8月29日 水曜日 雨

二人ともママにいじめられた。もうやだ。

「「ねえ、あなたの目の前の人はなにしてるの?」「

「.....」

「「なんで、目の前の人は倒れてるの？」」

「・・・・・・・・」

「「なんで、赤いものが出てるの？」」

「「わからない？」」

そう、語尾に曖昧な疑問をはためかせながら言った少女の目の前に横たわっている女性の表情は、

目がカツと見開き、憎悪と怒りがそのまま表現されたような表情のまま動きを停止していた。

口許からゆっくりとした速度で流れ落ちる赤い液体、その向かい側で少女の左の目からこぼれた一滴のなにか。

そして少女の手に握られており赤黒い何かを垂らした包丁。

この世界は、水だ。そうに違いない。誰かがそういったに違いない。

「そうか、あたしがやったんだ・・・」

時は遡ること、30分。

今日も少女はいつものように日に日にエスカレートしていく母親の暴力を必死に我慢していた。

慣れということは、プラスに働くこともあるがマイナスに働くことを忘れてもらっては困る。

いや、むしろこの場合少女は馴れたという言葉よりも《麻痺》しているといった表現が適しているのではないだろうか。

そんな今となっては生半可なものじゃ全く抵抗しなくなった少女を見かねて、母親は台所から違ったおもちゃを持ってきた。

銀色に鈍く光り輝くそれは、艶めかしい少女の肌にあてがわれた。

そのひんやりと冷たい感触と、凶器に纏わりつく《狂気》に恐怖し、少女は今まで無反応であった事が嘘だったかのようにそれに抵抗した。

おも

ちゃ

すると母親は悲鳴を上げながらたくさんの【少女にとっての拷問器具・母親にとっての玩具】が散らばった床に倒れこんだ。

最初の動物の鳴き声ともとれる奇声は、やがて小さくなり少女の真つ暗であった視界が真つ赤に染まっていった。

少女が目にした光景は、母親の喉元に包丁が深々と突き刺さりおび

ただしい血がドクドクと流れている光景であつた。

ここまで刺さっていれば誰が見ても即死であろつというその様を少女はただ茫然と眺めていた。

何を思つたか、彼女はその深々と突き刺さつた包丁の柄に手をかけた。

包丁は「ズブブ」という鈍い音を立てながらほっそりとした少女の力であつさりと抜けた。

そして少女は誰もが思わない、いや思おうともしない信じられない行動に出た。

なんと少女は自分の母親である目の前の倒れている女性の腹部に包丁とスツと出し、それを突き刺し、腹を開き始めた。

『あなたのお腹は黒いの？』

二つの声が重なつたようにも思えた、むしろ最初からそこに二人いたというべきか。その声はとても厚みを持った声であつた。

開帳された腹部は、数多の臓器がぐちゃぐちゃとこつた返しており、臓器の中でも最も大切とされる心臓はもちろん鼓動をしていなかった。

咽びかえるような臭いや常人では直視できないような光景。

それを見た少女はこう言つた。

「なんだ真っ赤なんだ」

そしてもう一人はこう言った。

「「こんな人でも赤い血が流れているんだ。てっきり黒い血なのか
と思った」」

二つの同じ意思を持った少女は包丁を持ったままそれを見下していた。

部屋の壁の白さとは似つかわしく、中央に横たわっている女性からは鮮やかな赤い血が水溜りのように広がっていた。

そして壁際には包丁を持ち、膝を抱え壁にもたれかかる少女。

「ねえ、どう思う」

「「どうなんだろうね？」」

「けど今は・・・」

『とつてもきれい』

・
・
・
・

・
・
・
・

ドクドクと流れ最初までは赤かった血が変色して茶色になって乾き始めた頃、少女は・・・

「もう特に何もないや・・・もういいよね」

「「そうだね、じゃあそろそろ・・・」

「・・・そういえばさあ・・・あなたは誰なの？」

「「私？何言ってるの、私は“私”だよ」

「わたし・・・私”ね」

「「そうだよ」「

「じゃあ、もういいっか」

そう言い残した少女は血が付着して今では赤茶色に変色したそれを喉元にあてがい、

躊躇という言葉を知らないかのように同じくそれを突き刺した。

血が勢いよく吹き出した鮮血が飛び散る刹那、もう声が出せない少女がこう言ったようにも見えた。

【真っ赤な水だ】

・

・

・

Water The World

END

君たちは『シュレディングアの猫』（コペンハーゲン派の解釈だが）
というのを知っているかい？

とりあえず、簡潔に説明すると…箱の中に猫と一つの放射性原子が入っており、そしてこの原子が放射線を放出する可能性は50%だ。

箱の中には、センサーがあり放射線を検知すると毒ガスを発生させる仕組みになっている。

つまりは、1時間後に蓋を開けると箱の中で猫が生きているか死んでいるかというのは50%ということになる。

ということは1時間に箱の中には必ず生きた猫か、死んだ猫がいるということになるわけだ。

だが中にはそう考えない科学者がいた。

その箱の中には、非実在の生きている猫と非実在の死んでいる猫の2匹がいて、箱の蓋を開ける瞬間にどちらかが実在化し現れるという

解釈の仕方だ。

…きつとこの断片小説の少女の意識は、もともと非実在の二つの意識があつて、

なんらかの関係で一つに収束しそこねてしまい意識が2つあるのかもしれない。

私の考えでは、そのせいでこの子の《世界》にブレが生じてあんな惨劇になってしまったんじゃないかと思う。

だが、これは普通に考えて多重性同一障害なのかもしれないという結論にも行き着く、つまりは多重人格ということだ。

それが起こる原因も、幼児の頃の虐待がほとんどであるのが今の見解だ。

…あれ？でもこの子はそれ以前から人格が二つあった気がしたな。しかも、どうやって1つの肉体で会話をしているというんだ？

《世界》なんて簡単そうで難しくて、難しそうで意外と簡単だった。りするのかもしれない。

2つの意識にせよほんとはただ、少女の架空の出来事なのかもしれない。

すべては解釈の違い、視点の違いで変わってくるものかもしれない。それじゃあ君は視点を変えてすべての事象を捉える事は出来るのかな？

（後書き）

今回が初投稿ということで、まだまだ文章が拙いですが
頑張って執筆していきたいと思いますので、よろしくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9716f/>

私の日記

2010年10月28日07時54分発行